

## レセプトデータを用いた臨床研究

口腔機能維持管理体制加算導入が老健入所者の健康アウトカムに与える影響

東京大学大学院医学系研究科 生物統計情報学講座

大野 幸子

**背景:** 口腔機能の維持は全身の健康状態維持のために重要であるものの、施設高齢者は歯科受診の機会が限定されることから、口腔管理はしばしば困難である。日本では2009年に介護保険に口腔機能維持管理加算を導入し、歯科医師による施設高齢者口腔状態の総括的な管理に対する診療報酬の支払いを開始した。この制度のもとでは、歯科医師は個人ではなく施設全体の口腔管理に対する助言やスタッフへ口腔ケア等の教育を行う。本研究の目的はこの歯科医師による総括的管理が施設小売者の健康状態を向上させるに充分であるか検討することである。

**方法:** 本研究では2009年から2012年の全国介護保険レセプトデータに対し、計量経済学的手法を用いて分析を行った。介護老人保健施設の施設特性を傾向スコアでマッチングし、742の口腔機能維持管理加算導入施設(170,874人)、同様に742の非導入施設を(167,546人)を同定した。その後個人レベルで差の差の分析を行い、口腔機能維持管理加算が施設高齢者の健康状態に与える影響を検討した。

**結果:** 個人の背景要因と時間変化による影響を調整したところ、重篤な疾患の発症、入院、費用、死亡で二群間に有意な差を認めなかったものの、自宅への退所は口腔機能維持管理加算導入群で増加が認められた(オッズ比 1.07; 95% 信頼区間 1.02~1.12;  $P = 0.008$ )。

**結論:** 歯科医師による包括的な口腔機能管理は、施設高齢者の健康維持に寄与し対処を促進する可能性があることが示唆された。